都立高校中退者のライフストーリーに関する実証的分析

―退学経験は何をもたらしたのか―

○中央大学　　古賀　正義

【概要】

１．目的

近年、高校中退者に対する社会的関心が高まっている。だが、それは中退率の上昇が教育機会の均等を脅かしているからではない。2000 年度以降、その割合は減少し、10 年度には 1.6%になっている。定時制通信制高校などを除けば、米国のような移民子弟が多くドロップアウト率が高い先進諸国に比べると低水準と解釈できる。ならばなぜ「中退」が改めて注目されるのか。

一言でいえば、若者への社会的排除が強まるなかで、義務教育化する高校での教育の欠落が、就業の失敗や家庭の崩壊、犯罪・疾病の助長など社会問題に直結する可能性が急速に高まっているからである。いいかえれば、中退によって学校を介した公的支援の入り口を失うことで、相対的貧困の世代間連鎖に巻き込まれ、社会参加が困難な若者が頻出しているからである。いわば「液状化したライフコース」の只中におかれるといえる。

そこで、従来「学校不適応事例としての分析」に主眼が置かれてきた中退研究を再考し、中退者の多様性に着目しつつ、ライフストーリー分析から、中退後彼らがどのように進路イメージを構築しやすく、そこにはいかなる教育経験・社会体験が影響を及ぼしていくのかを実証的に明らかにしたい。

２．方法　（「都立高校都立高校中途退学者等追跡調査」）

平成 22・23 年度都立高校中途退学者（郵送不達者を除く）に対して、東京都教育委員会を通して、悉皆によるアンケート調査を 24 年 7 月から 11 月に行い、988 名（有効回答率 20.4%）から回答をえた。この中から、インタビュー調査に応諾してくれた者を、中退した高校のランク・種別等を加味して 51 名を選び、退学した高校の評価や退学後の生活などについて一人約 1 時間余り尋ねた。回答者の男女はほぼ半々であり、すべて IC レコーダーに録音し、文字お越しも行った。

３．結果

従来のヤンキーな非行少年的中退者イメージとは全く異なって、調査した中退者には多様な実像が認められた。まず大別して、退学後に「就学指向」であった者と「就労指向」であった者とに違いがあり、退学自体の評価に大きな差異があった。前者は、中学時代からの学校適応の心理的な困難を語るケースが多く、自己肯定感も低かった。例えば、別な高校に再入学した A さんは最初の普通科に合わなかったとして、「教室にいるのがすごく苦手で」と述べている。他方後者は、継続的な通学を怠学してしまった契機を語るケースが多く、自己選択としての退学を強調しやすかった。例えば、フリーターB くんは工業高校を中退後、主にコンビニでバイトの生活をしているが、「テストのとき、自分、勉強しなくてもいけるだろうと思ってたら、案外いけなくて」と述べている。また、就学指向と就労指向が単純に２分されるのでなく、いまここの状況変化によって振幅するケースも少なくなかった。例えば、自傷体験に基づく自己の生きづらさを、家庭不和やパートナーとの同棲などの関係の変化から絶えず再解釈しようとした C さんは、「ガッツリ働いて稼いで早く家を出ようと思って」という時と、「あっ、私中卒じゃいけないなって」という時が、関わる人の変化とともに振幅して感じられたと語る。進路選択は、こうした自己とその経験のストーリー化の重要な入口となっていた。

４．結論

このように進路選択過程を通して、「退学した自己」のあり方に関する再解釈が行われ、学力や社会性等に関する自己能力の評価が繰り返され、ライフストーリーの語り直しが試みられていることがわかる。この詳細は当日報告することとしたい（拙稿「液状化するライフコース―都立高校中退者調査からみた中退問題と支援」早稲田大学社会学会『社会学年誌』第 55 号（2014.03）pp.3-18、「液状化するライフコースの実証的分析―都立高校調査からみた中途退学者の意識と行動」中央大学『教育学論集』第 56 集（2014.03）pp.21-64 も参照）。